

# 精神文化学会 第14回 学術大会

日時:令和6(2024)年11月4日(月)

会場:京都産業大学むすびわざ館

## 大会テーマ「生命論」

受付

10:25

第15回総会(会員限定)

10:35-10:50

司会 幹事 海老名宜陽

開会挨拶

10:55-11:00 理事 岡田晋亮

## 午前の部

基調講演

司会 専務理事 徳田季晋

11:00-12:00 幹事 上野 洋

「最初の分裂を繰り返すこと:ヘーゲル『論理の学』「概念論」における類概念」

類 Gattung は個体の生死交替を通して存続する。類とは何であろうか。ヘーゲルは『論理の学 Wissenschaften der Logik』「概念論」において、理念としての生命を論じる。生きた個体は、外界を自己に同化しようとする衝動を通じて自己を再生産する。そして、他の個体と自己とは無関係ではなく同じなのだ、という同一性に達するとき、生きた個体は類という規定を得る。しかしこの同一性、類的普遍性は個体が死して類に解消されることでようやく実現される。本発表では、まず前掲書最終章で種明かしされるヘーゲルの論理を総覧することから始め、二次文献を交えて生命における類概念について考えたい。

## 午後の部

### 特別講演

司会 理事 能村晋平

13:00-13:45 会長 近藤 剛

「ほとぼしる生命の昇華あるいは消尽—大義に殉じるということ—」

1970(昭和45)年11月25日、三島由紀夫は憲法改正を掲げて自衛隊に決起を呼びかけるも失敗し、直後に割腹自殺して果てた。この事件の約4年前のインタビューで三島は「人間の生命というものには不思議なもので、自分のためだけに生きて自分のためだけに死ぬ、というほど、人間は強くないんです。というのは、人間はなんか理想なり、何かのためということを考えているので、生きるのも、自分のためだけに生きることには、すぐ飽きてしまう。すると、死ぬのも何かのため、ということが必ず出てくる。それが昔言われていた「大義」というものです」と述べ、戦後の「大義」の喪失を嘆いている。衣食住の充足だけでは十全に説明することの難しい生命の意味付けについて、「大義」の概念から考察したい。戦時中の「大義」を杉本五郎中佐遺著から読み解き、それが戦後にファナティックと評されるにいたる経緯を、例えば城山三郎『大義の末』から丁寧にたどり、なおその上で「大義」を見出しそれに殉じた三島の行為を批判的に検討することによって、言わば、生命の精神論を展開する予定である。

13:45-14:00 intermission

### 研究発表 第一部

司会 幹事 溝浦健児

14:00-14:30 秋田文瑠

「生の生らしさについての試論」

自然科学の発展により、生命は生化学、遺伝学、情報科学等々の観点から、我々がよく見る生物の内側、細胞や分子の領域でも議論されるようになった。生命とは何か、確かにこの問いは、細胞や細菌にも適用されなければ問いとして不当ではあろう。しかし一方で、こうした生命観は哲学的に忌避されてきたきらいがある。生の生らしさが損なわれ、神秘性が毀損され、その極北では「生政治」の問題などで厳しい批判を受けている。とは言え、それを理由に科学の成果をスポイルして生らしさを取り戻そうとするのは反科学的であるし、イデオロギー的であるだろう。だからと言って、生の有り様を単に科学だけに還元する立場も疑わしい。どちらか片方を捨象することなく、建設的な生命論を取り出すことはできるのか。本稿では、その可能性について、議論を試みたい。

14:30-15:00 海老名宜陽

「生と性—生命とその原因および目的について—」

人間の生命について、その原因となる性との関係性から考えたい。人間はどのように生まれるのか、という問いには二種類の意味が含まれている。つまり、どのようにして生まれるのかというHowの問いと、なぜ生まれるのかというWhyの問いだ。科学は前者の問いには答えるが、後者の回答は示してくれない。本発表では、この後者の問いに対する答えのヒントを、人間誕生の原因である性の視点から考えてみたい。その際、単なる原因と結果の関係性だけでなく、生の目的としての性についても分析したい。生まれてきた人間は成長すると、やがて子を持つことを欲するが、これは換言すれば、性を原因に生まれた人間が、やがては性を目的として生きることを意味すると言えるのではないか。性に見られる、生の目的としての側面にも焦点をあてたい。性がなくとも人は生きていけるが、そこに欠けるであろう要素について考えたい。

15:00-15:30 森 一郎

「『生命の尊さ』をテーマとする道徳科の授業開発 —「日本の生命観」の視点から—」

現在の道徳科の授業において、「生命」に関する事項は、最も重要な課題となっている。「学習指導要領」によると、「『生命の尊さ』という項目は道徳科の全体に関するものであり、他の項目を扱う場合においても、『生命の尊さ』を意識した指導が必要である」としている。本発表では、「生命の尊さ」の背景となっている複数の生命観についての先行研究を概観すると同時に、今まであまり言及されなかった「日本の生命観」に焦点を当てて検討していく。そのため現在使われている「生命の尊さ」の教材を批判的に検討し、そのことを踏まえて「日本の生命観」に沿った授業を行うためには、どのような教材を使い、具体的にどのような授業展開をすればよいかを提案する。

15:30-15:45 intermission

## 研究発表 第二部

司会 幹事 仙波義規

15:45-16:15 住 恵美

「内村鑑三の天然観—無教会主義からの考察—」

世界の平均気温が二年連続で最高値を更新した例などがあるように、地球規模の異常気象が、ついに顕著なものとなってきた。かねてより、このような地球環境の悪化を危惧し、事態に歯止めをかけるため「持続可能な社会」を標榜した取り組みが行われているが、ゴールに至るまでのルートを見失い、半ば形骸化しつつあるのではないかと感じる。様々な事象が絡み合った物事を熟考せず、一面的な考え方によって導入された施策からは、実際にどれほどの効果が期待できるか疑わしい。そのため先達の知恵から現代に反映させられる学びを得ようと考えた。特に日本思想史の中で、天地万物に対する特異な解釈を遺した内村鑑三の「天然観」について、キリスト教解釈の一つである

「無教会主義」を手がかりに考察し、これからの自然環境との向き合い方を考える。

16:15-16:45 田中友紀乃

「悟りへの道—八正道における『正しさ』とは—」

本発表は筆者が卒業論文で取り上げた「ニルヴァーナ」についての考察を基に、その中でも最も重要であろう「八正道における「正しさ」」を主題として取り上げようと思う。主題に入るにあたり、仏教の最終目標を明確にする。そしてその最終目標に至る方法として釈迦によって示された「八正道」、それを語るにあたり最も要となる「正しさ」について『ダンマパダ』と『スッタニパータ』を参考に述べていく。この「正しさ」についてだが、経典でも明言されておらず、かなり曖昧な概念ではある。よって本稿では世間一般常識で捉えられる正しさを「规律的正しさ」、現代の仏教で解釈されているであろう正しさを「道徳的正しさ」と定義し、これらを否定する形で八正道における「正しさ」を「悟りで必要とされる正しさ」として考察していこうと思う。

閉会挨拶

16:45-16:50 理事 能村晋平

記念撮影

懇親会

17:30-19:30 がんこ京都駅ビル店(京都駅ビル2F 京都劇場向い)

☆注意事項☆

・昼食について

…JR「丹波口」駅の周辺にはレストラン、コンビニエンスストアがありますが、会場の近隣にはございません。各自でご準備いただく場合、会場での飲食は可能です。

■むすびわざ館へのアクセス



JR「丹波口」駅 徒歩 7 分／阪急「大宮」駅 徒歩 11 分／京福「四條大宮」駅 徒歩 11 分